

Uncle Tom's Cabinにおける家庭主義・キリスト教主義とエロティックなサブテキスト

原口, 遼

<https://doi.org/10.15017/1176>

出版情報：文学研究. 98, pp.29-48, 2001-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：



Uncle Tom's Cabin における家庭主義・キリスト教主義とエロティックなサブテキスト

原 口 遼

次は2000年5月に開催された九州アメリカ文学会第48回大会（於福岡大）のシンポジウムでの原口の報告を基に、その後加筆したものである。シンポジウムの論題は「白人作家たちの黒人観」であった¹。本論にはいる前に、今なぜ「白人作家たちの黒人観」かということについて説明しておく。そうした方が、わが国における目下のアメリカ文学研究における関心の移り変わりが分かって便利かと思うからである。そのような背景について少しばかり述べた後、本論に入ることにする。

[黒人という“Race”を取り上げる理由]「白人作家たちの黒人観」というテーマを取り上げた理由だが、アメリカ文学の分野では70年代に入り、文学研究の方法論への意識が尖鋭になり、“Deconstruction”という文学研究の方法が叫ばれ実行された。これは、一種の“New Criticism”（文学テキストを重視し、作品の生まれた歴史的背景や作家の意図などを極力無視する方法で、40～60年代に栄えた）の極端化した形とも受け取られて、テキストそのものの重視はいいとして、テキストの中での言語的なレベルでの遊戯、あるいは概念間のアクロバティックな結びつけ等から、一種の知的遊戯に堕すことが多かった。またある形而上学と他の形而上学との間の歴史的・文化的な区別をしないでいきなり結びつけ、議論するということが多かった。

80年代ぐらいからはそうした方法に代わって、“New Historicism”という

研究方法が主流を占めだした。その方法と理念はそれぞれの批評家によって違いがあり様々だが、極く簡単に言えば、それまでのアメリカの文化的伝統の主流派をなすと見られた白人男性たち（いわゆる WASP の男性たち）の立場からする文学事象の取り扱いを打破し、比較的無視されて来た他の立場からの観点を導入することであった。英米文学における植民地主義（異文化の蔑視）の検証とか、feminism 的アプローチ、あるいは、黒人やインディアンの歴史・文化の見直し、あるいはアジア系作家の掘り起こしなど、それまで軽んじられた者たちの立場に立って文化・文学事象を改めて眺めてみようとする方法であった。それは、「多文化主義」(“Multiculturalism”)の流れに乗って、たちまちの間に批評界を席卷し、現在もそのような研究方法は隆盛を誇っている。特に大学院教育を受けた女性研究者たちの増大に伴い、抑圧されて来た女性たちの歴史や社会構造を指弾し、女性が持つとされる本来の権利や美質を文学作品の研究を通して指摘し、主張するという“Gender Criticism”あるいは“Feminist Criticism”として結実し、そのような立場からの論文が量産された。

非白人の側からの異議申し立てとして、人種的な観点から“Race”の概念を洗い直すという批評活動も行われた。もちろん、階級的特権者に対して疑問を呈するという批評もあった(“Class Criticism”)。かくして、この間に最も頻繁に口に上せられた概念は恐らく“Race, Class, & Gender”という三種類の概念で、それはいわば三種の神器のごとくに祭り上げられ、何はともあれそのような概念をキー・コンセプトとしてアプローチすると、何となく議論の形態をなすという重宝さもあり、現在もそのような流儀の文学批評は花盛りである。そうした批評は確かに作品に新たな光を当て解釈し直すことを可能にする一面があるのだが、一方、こうした批評は、論者が登場人物の行動や意識に寄り添いつつ、ディスコース上の偏向を分析し、そこに見られる抑圧された立場の者たちを救済するというプロセスを経ることから、論者自身の積年の恨みつらみを晴らすといった、いわば「恨み派」(the “grudge

school”) とでもいうべき流派を形成しがちであったことも否めない。

その中でも特に“Feminist Criticism”は隆盛を極めた。その批評の中で、最も頻繁に使われた批評概念は、女性の社会的抑圧の根元としての「家父長主義」(“Patriarchalism”)であり、その指摘と糾弾とであった。わが国における文学批評で、およそそのような概念を持ち出して批評が行われるときには、そのほとんどは論旨は一直線的で、対象の理解と掘り下げは判断停止の状態におかれ、文学作品の持つアイロニーは捨象され、お定まりの feminist criticism の批評用語の反復に終始しがちで、実質が伴わない場合が多かった。そういう次第で、今回 feminism 批評は横に置いておくことにしたのである。

一方の「階級」(“Class”)という概念については、何とんでもわが国には明治時代まで士農工商などの封建的身分制度があり、戦前までは家長制度などという明治憲法に依る家督相続の制度があり、選挙権も成人男子に限られていたという男子中心主義の固定的社会があり、階級制度についてはむしろ本家本元みたいな日本の側から眺めたときに、アメリカの流動的社会に、階級の概念を探るという方法が、現段階においては今一つ定めがたいので(もちろん、私自身としては、例えば、フォークナーの南部貴族 Sartoris 家 vs. 貧乏白人の Snopes 家との対立、成り上がり者たちの Sutpen や Gatsby vs. 既成の南部のプランテーションの所有者や東部の establishment、或いは、naturalism の小説家たちの小作人 vs. 地主・資本家等々の対立等、若干の考えがなきにしもあらずなのだが)、今回の論題として“Race”をテーマに据えることが最も時宜を得ていると考えたのである。それも黒人問題を取り上げることが、議論を活発にすると考えた。なぜなら黒人存在とは確として実体のある存在であり、現実には差別されて来た黒人の問題を取り上げることが、アメリカの社会や歴史の実態に迫ることを可能にし、アメリカ文学の状況を眺める場合にヨリ実質的議論が行われるであろうと考えたからである。

ただ“Race”と一口に言っても、広義には ethnicity の問題などが上がって来る。そうすると特に最近の“Multiculturalism”の研究が隆盛の流れの中で

は汗牛充棟の研究成果があり、問題が大きすぎる。であるから、今回は限られた時間内で処理できる範囲を定めるために、“Race”と言っても黒人種、それも19世紀中葉の、そしてさらには白人作家たちの対黒人意識は如何という風に問題を絞って行き、「白人作家たちの黒人観」というテーマに焦点を定めたのである。それをさらに黒人作家たち自身の人種意識などと言い出すと、黒人奴隷自らが執筆した Frederick Douglass や Harriet Jacobs などの自伝などを取り上げざるを得なくなる²。そうなると問題は直ちに20世紀の黒人文学 (Du Bois, Richard Wright, James Baldwin, Ralph Ellison, etc.) へと繋がって行き、そうなるともう一つ別のテーマを立てる必要が生じて来る。従って、問題を19世紀の南北戦争付近を中心におき、それに関与した者たちの文学を取り上げるということにしたのである。

[黒人を取り上げる場合の問題点] さて「黒人問題」をアメリカ文学会で取り上げることについては、問題が2、3ある。それはまずこのトピックは歴史学や政治学の分野のそれではないか、つまりはアメリカ文学会ではなく、アメリカ学会のテーマではないかということであって、はたして文学上のテキストを十分に論じられるかという問題がある。

次に、黒人存在は日本人の私たちにとっていわば対岸の問題ではないかといったことがある。例えば奴隷制度、南北戦争、黒人の人権問題と言っても、それはアメリカの問題であって、我々の切実な問題にしにくいということがある。もう一つはこうした人種問題は政治的な態度決定の問題をはらんでるので、それをただ文献やテキストのみで調べて行くことへの疑問ということも起こって来る。あるいは態度決定以前の問題として、例えば黒人問題に全く無関心という態度もありうる。あるいはプリミティブだが、極く一般的な反応として「あなたはご家族の一員が黒人と結婚すると言い出した場合、どうされるや」といった短絡的、かつ感情の次元でのリアクションもある。

しかし黒人問題がアメリカでは、いわばエデンの園に忍び込んだ原罪のごとくに、根元的な問題であることは言を俟たない。Norman Podhoretz の

Doings and Undoings 中の「黒人問題、私たちの問題」³などにも書かれているとおり、黒人問題は文字通り「私たちの問題」なわけである。あるいは、Toni Morrison の *Playing in the Dark* (『白さと想像力』)⁴に曰く「社会とテキストの周辺部に位置する黒人存在なくして、アメリカとその文学もあり得ない」との指摘もあるように、それは最重要なトピックである。

フォークナーが彼の作品の中で南部出身の登場人物の Quentin Compson に呟かせて言うには「初めて東部にやって来たとき、あの連中を黒人として考え、クロンボとして考えてはいけなと、絶えず自分に言い聞かせた」⁵というように、アメリカ人の中でも南北によって黒人意識が全く違うといった問題もある。そして現在のアメリカの人口の中で約14%を占める黒人存在を無視してはアメリカを考えることができないという意味では、黒人問題は常に重要な問題であり続けて来たのである。従って、アメリカ文化・文学にとって黒人問題は、重要なテーマであり続けて来たことは確かである。

さて今度は「19世紀白人作家の黒人像」という過去の一時期をテーマに接近する場合に、方法上起こりうる問題を述べよう。我々は19世紀の中頃の作家を扱うわけだが、そのときにおおよそ二つの接近法が可能だと思われる。一つは現在の時点、即ち西暦2000年の時点から当時の作家たちにアプローチし、彼らの黒人意識の偏見・限界を糾弾したり、あるいは時代を乗り越えているとして称揚する方法である。こうしたアプローチは現在の時点での人権意識の進んだ高みから見おろしたとき、明快かつ鮮やかな切れ味を見せられる方法になりうる。もう一つのアプローチは、そうした作家たちを、当時の歴史的なコンテキストの中に置き戻してみ、彼らの抱えていた問題意識を彼らの立場に立ち、彼らの価値観・感受性から考えてみることである。つまり、当時の作家たちの人種に対する意識を、彼らの意識の次元に立って抉りだし、彼らの苦悩・格闘の跡を辿りつつ、ある意味ではその人間劇を生きなおしてみようという方法である⁶。しかし、こうしたアプローチは、テキストの行間に散見する作家の微妙な人種意識を丁寧に抽出してみたり、あるいは

当時の政治・経済・社会さらには宗教意識などの点検・調査等が要求されて、随分と労力を要する方法である。

以上のような前置きをした上で、私の場合は、Harriet Beecher Stowe の *Uncle Tom's Cabin* を取り上げる。そしてそれが持つ一種の迫力、ベストセラーになった理由、逆に今では読まれなくなった理由、近年の再評価と canon の見直しといった問題、ストウの白人作家としての思想的限界、女性作家としての強み、Sensationalism の本質、それに小説の伝統と現代的意味などについて考えてみることにする。

『アンクル・トムの小屋』の「家庭主義」と「キリスト教義」 Harriet Beecher Stowe (1811-1896) の *Uncle Tom's Cabin* (『アンクルトムの小屋』) はアメリカ南北戦争開始 (1861年) の10年前の1851年から週刊誌 *The National Era* に約1年間連載され、翌1852年に出版されるやベストセラーになり、年間に30万部を売りつくし、南北戦争前夜の黒人奴隷制度反対について世論を形成するのに大いに預かった書と言われている。リンカーン大統領が南北戦争中にストウ夫人に面会したとき「この小さな女性が大きな戦争を引き起こした女性なのか」 (“the little woman who started the great war”) と賛辞を述べたという逸話が残っているように⁷、確かに奴隷制度の中の悲惨さを描き、感情に訴えるものを持っている。

しかし『アンクルトムの小屋』は大作であって、ペンギン版で約600頁、翻訳でも上下二段組で500頁を越す大部なものである⁸、これを実際に通読した人という人は少ないのではないかと思われる。それでアメリカでも日本でも少年少女向きのダイジェスト版が出ていて、そこでは少年少女向きでない場面、特に性的な場面がカットされている。

アメリカ文学批評の世界では1980年頃から、これまで中心的な価値観 (白人男性の WASP のそれ) から文学史が編まれていたことによってこれまで無視されて来た文学作品を掘り起こし、見直そうという運動があり、canon (正典) の見直しが行われ、また feminism 的手法の隆盛から、当時は社会的

に一段低い存在として見なされた女性によって書かれたが故に無視されたとされる諸作品を見直そうとする動きがあった。同時に、作品内世界においても、地味で目立たないが、着実に堅固な女性的価値を再発見し、これを評価するという動きがあり、その目的に『アンクルトムの小屋』がかなっていたということで、本作品をアメリカ文学史の正典の位置に押し上げようとする論文がたくさん書かれた。つまり本作品を女性が書いた手すさびの感傷小説という見方から、もっとシリアスな意味を孕んだ作品であるとして称揚する論文がたくさん出現したのである。

[名場面]さて、議論を簡潔に進めるという意味から、今、全体の粗筋を述べるより、作品中、読者に訴える名場面を指摘し、それを中心に論じることにする。そのいくつかは大抵の読者が覚えているように次のような場面である。

1. 奴隷商人にわが児が売られることが決まった若く美貌の混血の黒人奴隷のイライザ (Eliza) が幼児のハリー (Harry) を抱いて逃亡し、奴隷州のケンタッキー州側から自由州のオハイオ州側に渡ろうとして、真冬のオハイオ川の流水の上を跳んで逃げるシーン。(1～8章)
2. 少女のエヴァ (Eva) が、同い年の黒人の少女のトプシー (Topsy) が性悪で反抗的で主人の言うことを聞かないので、その曲がった心根を直して改心してくれと頼むシーン。「私はもう結核で死ぬ身であるので、この世での最後のお願いを聞いてね」と言って頼むシーンである。(13章) これは、少年少女向けのダイジェスト版のハイライトであるが、何しろこのエヴァには聖少女としてセックス臭が全く欠けた純真な少女であるので、そのメッセージは天使からのものとして、無条件に教室用の情操教育にかなったからである。
3. アンクルトムが冷酷な奴隷主のサイモン・リグリー (Simon Legree) に撲殺されるシーン。トムはリグリーの奴隷農場から逃亡したリグリーの情婦キャシー (Cassy) と新たに情婦用に買い取られたエメリン (Emmeline) という黒人奴隷の潜伏先を知っているにもかかわらず、それをリグリーに

告げず庇い続け、反抗し、撲殺される。(40章)

4. そのトムの瀕死の場面に、元のトムの所有者であったシェルビー (Shelby) 家の若い息子ジョージが、時既に遅くなってから駆け寄ってきて「トムは今や買い戻したので自由なのだ」と告げる場面。(41章)

5. ケンタッキーの故郷でみんながトムの無事の帰還を待っているとき、ジョージからの知らせは、トムが死んでしまったという最も悲しい知らせだったという場面。(43章) こうしたところが読者のスリルを呼び感涙を流させる有名な場面であろう。

こうした緊迫した山場に限らず、全編に渡って確かにフェミニズムの批評家たちが指摘するいわゆる「家庭的イデオロギー」(“Domestic Ideology”)があることは確かである。「家庭的イデオロギー」とは炉端や台所など女性の主たる居場所を重視し、家庭的な人間関係の温かさを重視する立場と主義で、それは現代の効率主義的な生き方、男性本位の競争を旨とするビジネスの世界に対してのアンチテーゼとして積極的な価値と役割を持つとされる主義である。特に主家に隣接して立つ「トム小父の家」(“Uncle Tom's Cabin”)の台所で、料理の腕を振るうトムの妻クロウ (Chloe) の周りに集う、黒人家族と主家の白人の子供たちとの家庭的な雰囲気などには、黒人家庭の持つ温かい家庭風景が十分に描かれている。

[センセーショナルな意図]次に、黒人トムが労働で疲れた他の黒人たちを助けたり、また逃亡した女性奴隷たちの生命を救う形で自ら撲殺されることは、もちろん礎になったキリストの殉教を模していて、キリスト教の教義(“Christian Doctrine”)が、いかに作中人物たちの生きる支柱と成り得ているかを示している。つまり、本作品には明らかにキリスト教的なメッセージを読者に伝えるという試みがあるので、キリスト教の教義も本小説のもう一つの大きな枠組みをなしていることは確かである。ちなみに、コロンビア大学教授の女性学者アン・ダグラスなどは、こうした女性の感傷小説家たちは(当時の女性の常として)社会制度や経済構造などへの理解が浅く、同様に

知的レベルの低い読者層の感情面に訴えたのだとして、19世紀半ばの女性たちの教育程度の低さと欠如を嘆いてみせていた⁹。

それに対して、80年代に入り、デューク大の Jane Tompkins 教授などは、むしろこのような、政治的なメッセージを孕んだ、感情に訴える感傷小説こそが、(程度の低いとみなされた)女性たちを一体化させ、時代を変える変革の力になったので、むしろ政治的なメッセージは大事な要素であり、そう考えると感傷小説は重要な小説ジャンルであり、こうしたお涙頂戴式の作品の価値を評価し、救済すべきだと主張したのである¹⁰。

私個人としては、家庭的な人間関係の温かさの重視、あるいは母と子が引き裂かれることへの痛切な感情からする奴隷制度反対といった、場所と時代を越えたユニバーサルな価値観である“Domestic Ideology”の存在を認めるに吝かではない。だがもう一方のキリスト教的な教義の主張(“Christian Ideology”)については、確かに当時の読者であった白人キリスト教徒の立場に立てば、抵抗無く受け入れられたのであろうが、そうでない立場の者から見た場合、それはやはり白人種からするところのキリスト教第一主義的な偏狭な感じがして、その主張を全面的には受け入れることは難しい。もちろん、キリスト教義に依る依らずに関わらず、それが伝える人道主義的なユニバーサルな面は、何教徒にとっても大筋において認められるからこそ、世界中のベストセラーになったのであろうが。

[白人至上主義からする黒人問題解決策]もちろん白人女性としてのストウが持つ時代的な限界は、今世紀の男性黒人作家たちが攻撃したところである。攻撃されたのは、ストウが黒人存在のことを白人種に劣る人種として把握したこと、また奴隷制度という体制そのものが孕む悪を指摘できなかったことである。何しろ、ストウは週刊誌 *The National Era* の編集長に対して「私は奴隷制度の持つ最良の面と少しの最悪の面について書いてみたい」と記した手紙を送っているからである¹¹。つまり、良い奴隷主・悪い奴隷主、良い奴隷・悪い奴隷などについて書いてみたいということであるから、組織・体制

としての奴隷制度の悪そのものについては理解が及ばなかったわけである。

ストウの奴隷問題への解決策は第45章（最終章）に記してあり、小説全体の後日談として小説全体へのコメントとして述べられている。それはアフリカ大陸の西海岸に黒人だけの国であるリベリア共和国を作り、そこにアメリカのキリスト教文明で教育された黒人たちを戻してやり、暗黒大陸を文明化しようとするものである。そのような理念から、小説の最後では、登場人物たちが続々とリベリア共和国に戻され、ハッピーエンディングの形を取っている。こうした解決方法は、もちろんアメリカで英語とキリスト教による教育を施された黒人たちが、前文明状態にある現地の黒人たちを周辺部に押しつけて、支配を行うわけで、それはかつて、白人たちがアメリカ大陸において、「明白な宿命」“Manifest Destiny”の合言葉の下、原住民のインディアンを殲滅し、周辺地区に追いやった支配形態と類似するもので、大いに問題がある解決策であるのだが、ともかくも、こうしたストウ夫人の解決策は当時是一个の大きな解決策として、実際に採用されてもいたのである。しかし、今世紀に入るや、こうした考え方は、白人種によるご都合主義的な考えであるとして、黒人男性作家たち（Wright, Baldwin たち）から大いに攻撃され、黒人たちの人権の獲得の過程と比例して、本作品の評価が急速に低落して行ったのである。

〔黒人女性との性交渉への強い関心〕 本作品にまつわる canon 論争があることから、私はまずは、虚心坦懐に本作品を受け取ってみることにした。もちろんなぜ本作品が当時そのようなベストセラーになったのかという興味もあった。読み返してみて、この作品が超ベストセラーになったところの理由の一つには、もちろんトムキンズなどの言う、当時の女性読者たちにの心に訴えた「家庭主義」「聖書主義」の枠組みであると理解した。しかし、読者に最も訴えたのは主人公のイライザや奴隷キャシーなどの白黒混血の女性たちの小説的な扱いではなかったかと思われた。特に、奴隷制度の南部プランテーションの無法地帯の中で、男性の欲望のままに性的に搾取され、翻弄され、

声を圧殺された黒人女性奴隷たちの運命が、読者に最も訴えたのだと思われる。

イライザが我とわが子を助けようとして逃亡するストーリーは主筋で、比較的読者に知られているので省略する。ここでは、もう一人の主要な登場人物であるキャシーの運命とその描写について取り上げる。キャシーはニューオリンズの白人奴隷主と黒人奴隷との間にできた混血女性であるが、かつては豊かな主家で屋内奴隷として働きつつ、子供の世話をしながら、フランス語や聖書などを教わったりし、その後自分を愛する白人の所有物になり、(つまり妻代わりという立場になる。しかし黒人種のため結婚までは到らない。)子供を二人設ける。その後、その男性がコレラで病死すると、他の白人の情婦にされ、また子供を生むが、しかし前の白人の夫が死ぬや、子供たちが借金のかたに売り飛ばされたという身を切るような経験をした。そのことを思い出すにつけ、今度生まれた子供を生かしては、またもや苦難の人生が降り懸かると懸念し、自らの手で子供を毒殺する。その後、所有者兼愛人のその白人が仲間の悪巧みに載せられ、賭博に引き込まれ借金を抱えるや、その借金のかたとして自分自身が競売に掛けられ、ついにサイモン・リグリーという冷酷な奴隷主に競り落とされ、強制的にその情婦にされる。つまりキャシーは、3人の白人男性の情婦として次々に盪回しされるという運命を辿る。そして、現在は奴隷主リグリーの愛人として、憎しみをもちながらも性生活を続け、いわば気が狂ったような形になりながらも生き続けるが、そのリグリーがさらに若い情婦エメリン (Emmeline) を買って、プランテーションに連れ戻ったときに、ついに、キャシーはエメリンとともに計って、二人で逃亡するのである。

それは Harriet Jacobs の自伝¹²にも書かれているように、特に美貌の若い混血女性が必ずや性の対象にされるという運命を抉り出したところなど、北部の読者に対して南部奴隷制下のプランテーションの暗黒部を描いたという意味では、当時としては大変にオリジナルであったのだと思われる。描写も

なかなか vivid で、女の乳房を驚嘆みにしながら手込めにしようとするようなシーンが書かれている。つまり、『アンクルトムの小屋』の読者の主要なスリルと興味は、改革者の義憤である前に、もっと複雑なサディストの性的なくすぐりと一種の覗き趣味に由来していると思われる。北部の女性読者が、南部のプランテーションの内部で、白人の所有者が黒人奴隷を強姦することを読まされるということは、白人と異人種（黒人）との性交渉というおぞましい場面を見せつけられつつ、その覗き趣味を満足させられるという形態を取っていて、ストウはそのことをあたかも眼前に目撃しているかのように迫力豊かにドラマティックに描いたためにベストセラーになったのであろう。

つまり、ハリエット・ストウは、牧師一家の娘として、一方でもちろん極めて道徳的ながら、他方で極めて好色な意識と関心を隠し持っていた。そしてストウは性的に搾取され、男の間を転々としてたらい回しされる混血女性の性的な体験を中心とする運命に、最大の関心を寄せている。そして、好まぬながらも性生活を強いられながら、女性性(womanhood)を失いながらも、セックスを介しながら感情的に強い女に変貌していき、ついには逆に奴隷主を精神的に支配し、反逆し、そしてついに逃亡するに至るなど、強い女に変貌していく過程を描いている¹³。こうした描写は、決してステレオタイプでなく、自身南部と北部の境界地区のオハイオ州のシンシナティに住んだ経験があり、またニューオリンズに住んでいた弟からの見聞を聞くなどして、直接得た情報から書かれていると思われる¹⁴。また一方、牧師の妻として子供を沢山生み育てて来た、性と出産と子育ての体験から来る、洞察力に満ちた描写と思われる。つまりアンクル・トムの撲殺死、リトル・エヴァの結核死、イライザが奴隷商の一隊に捕まりかかり、再三に渡って難を逃れる場面、それにキャシーが白人の男たちの間を盪回しされる運命の変転には、スリルとともにサディスト的な、一種の性的な倒錯的な読者の衝動を刺激するような潜在的な喜びがある。そしてストウがそうした小説的題材を本能的に掴む能力を持っていたことを示している。つまりは、異人種間のセックス、強姦、撲

殺といった暴力的な事件の中に、聖書の教養を持った道徳的な北部白人女性たちにとって、最も刺激的な題材を掴み取り、それを描写しきるといった小説家としての嗅覚と胆力をストウが持っていたことを示していると言える。確かに本小説には sadism, masochism, rape, voyeurism などに関連して、一方で道徳心に訴えつつ、他方で女性読者たちの好色性に訴える心理的な洞察とラジカリズムが潜んでいて、それが本小説の一つの大きな迫力の源になっていることは疑えない。

[トムの撲殺死の二重のインパクト]最後のトムの撲殺死の場面の描写も迫真的である。(33章)それはまずリグリーが、綿畑で働く女奴隷が怠けているとして、トムに「お前、これに焼きを入れろ」と鞭打ちを命じるのだが、トムはそれを拒否する。(「トムは穏やかな声で語っていたが、聞き違えのないほど決然としていた。」309) またキャシーとエメリンがプランテーションから逃亡したときも、彼女たちの隠れ家を知っていながら、奴隷主のリグリーにそのことを告げず、逆に「私はその場所を知っておりますだ。でも何も言えませんだ。死んだってかまいませんだ。」(358)と言い、リグリーの神経を逆撫でするような主張をなし、そのためにリグリーから殴られ続け、結局撲殺されるに至るのである。このような場面の、トムの奴隷主への反抗と主人の殴打、そして結局は撲殺に到るという過程の描写には、暴力死の悲惨さはもとより、撲殺死・殉教死に伴う感情の高揚とエロティシズムを十分に知った作家の洞察がある。トムは瀕死の中でリグリーを恨むどころか、磔になったキリストのことを思い浮かべつつ、死んで行くのである。つまりは、本小説においては、このような残虐シーンにおいて典型的なように、暴力 vs. キリスト教的博愛、サディズム vs. 家庭的な温かい人間関係とは、常に表裏一体になって二重音として読者の耳に訴えるという構造をなしているのだ。

またトムの死に際して、若主人のジョージ・セルビーが約束通り、トムの身柄を買い戻すために戻って来、瀕死のトムに対して「お前は買い戻したのだから、自由の身になったのだ」と言いつつ、トムの虐殺死に立ち会う姿な

どは確かに典型的にメロドラマティックで類型化された場面ではあるが、しかし紅涙を絞らされる状況設定であり感動的である。そこにおけるメッセージは、もちろん単なる暴力の描写でなく、殺される者の尊厳と高貴さと同時に性的倒錯とも言えるサディズムの異常さをも示しているのもので、トムキンズがいうように政治的なメッセージやプロパガンダの部分をこそ評価し直すべきというより、むしろストウ夫人の小説家としての場面作りの巧みさやそうした性的ニュアンスの込められた暴力事件への本能的嗅覚のことを評価すべき種類のものであるであろう。即ち、ストウには苦悶のエロティシズムを洞察する力があつた。そうした関心から、彼女は、南部奴隷制度の無法地帯での、外部社会からは隠蔽されていた奴隷主の暴力行為、特にその性的に搾取される運命にあつた黒人女性たちの声にならぬ窮境を白日の下に曝したのである。特に冒頭の章のシェルビー家での奴隷売却の契約のときから、若く美貌の混血女性であるイライザが読者の前に現れるや、彼女が常に性的な関心から見られていて、彼女の逃走劇にも、若い女性が一旦捕まったら必ずや奴隷主の毒牙にかかるだろうとする読者の懸念に訴えるサスペンス作りがあることは確かである。

[道徳性と好色性の文学伝統] ストウ夫人はもちろんクリスチャンの牧師の家庭の中で育つた極めて道徳的な作家であつたが、また他方で相当に好色な面を隠し持っていて、性的な題材が読者に訴える力を十分に知っていた。黒人女性奴隷たちが夜も昼も男性を憎悪しつつ、性を搾取されつつ、逆に彼らを支配して行くという男女の性の力学のことをリアルに描いていることは、必ずしもステレオタイプでなく、ストウ夫人ならではの筆力であつたと判断される。それはそれから約50年後の *The Awakening* (1899)¹⁵ の中で、女性のセクシュアリティを描いた Kate Chopin よりも半世紀も前の女の sexual power の発見であつた。その奴隷制度の中における過激なリアリズムとセクシュアリティへの認識には、やはりラディカルなものがあり、性的な存在としての女性の描出という意味では、一般の読者、特に女性読者の感情にモロ

に訴える力があつたのだと思われる。それは、今世紀の D. H. Lawrence がその小説で性の力の影響力を抉りだした文学にも比すべき革新的なものであつた。

それが私がこの小説の現在的な価値として評価するところで、そこには女性の持つ性的攻撃への本能的な恐怖心、恐い物見たさ、性的に搾取される黒人女性奴隷たちの運命への悲劇的な(恐怖と憐憫を催させると言う意味での)洞察がある。例えば、将来に待ち受けるわが奴隷の子の不幸と不憫さを思つてわが子を自らの手で殺す黒人奴隷キャシーのエピソードは、100年以上も後の、トニー・モリスンが『ビルブド』(1987)¹⁶の中で、追っ手に迫られた黒人奴隷の母親が、自分のこれまでの人生の不幸を思い、思い余つてわが女兒を自らの手で絞め殺すシーンに再現されているが、同様の洞察力をもつシーンであると思われる。

つまり、『アンクルトムの小屋』は、白人作家としてのストウの奴隷制度への理解の限界や、白人としての黒人種への偏見や、白人種のご都合主義的な問題解決法などの提示にもかかわらず、大きなインパクトを持っている。それは、確かにキリスト教的な同胞愛と同時に、無抵抗の抵抗という一種の殉教の思想を提出しており(“Christian Doctrine”)、また一方、それは奴隷制度が、通常の家家庭平和の否定につながることに警告というメッセージ(“Domestic Ideology”)を提出している。しかし、奴隷制度がなによりも黒人女性たちを性的に搾取するという悪を内包することを暴き、そうした若い黒人女性たちの置かれた運命を具体的にリアルに描くことで読者にショックを与えると同時に、サディズム的な覗き趣味を満足させる形でアピールしたことが、本作品をベストセラーにした大きな要因として考えられるのである。

本小説は、いかにも政治的なパンフレットであり宣伝の調子の強いプロパガンダ文学である。と同時にそれは黒人のフレデリック・ダグラスの自伝やハリエット・ジェイコブズの自伝などと同様に、アメリカ南部でのプランター

ションの内側での暴力と陵辱の実態を、(特にそうしたことに疎い北部の白人たちに対して¹⁷⁾ 白日の元に曝したという意味では、新境地に行く小説だった。

ストウは「この小説は自分が書いたのではない。神が書かせたのだ」¹⁸と告白しているが、ストウは女性ならではの恐怖心と好色性と理想主義との両方を提出することのできた直感的な優れた物書きであった。「家庭主義」(“Domestic Ideology”)と「聖書主義」(“Christian Doctrine”)の存在を高く評価するフェミニズムのジェイン・トムキンスなどは、もちろん高等教育を受けており、政治的なプロパガンダや政治力学内それに対抗する家庭主義等などには詳しいが、そうした無意識の次元のもつ小説的 impact の意味と大きさをむしろ見逃している。ホーソンが「あのいまいましい物書きの女たち」¹⁹と吐き捨てたときに、女性たちの持つ感性や感情の力がいかに強大であるか、そうしたところで女性たちは行動し、小説を読むのだということがよく理解できていなかった。もちろん鯨を寓話とし、猛烈に観念論的な神学にかかわりあっていたメルヴィルなどには、到底理解が及ばなかった領域であった。

[好色性と道徳心という二重性]この後、ストウ夫人は身近な題材が尽きると、バイロンとその妹の近親相姦の実状を暴くような文章を書いた²⁰。つまり彼女は良い意味でも悪い意味でも、強い道徳性を持ち正義感旺盛な女性だっただけに、それに比例した過度の好色的関心を持っていた。私見によると道徳性と好色性の併存はチョーサーの *The Tales of Canterbury* の昔から、シェイクスピアの猥雑性の側面はもとより、また Richardson の誘惑小説の *Pamela* のときから、今世紀の D.H. Lawrence の時代に到るまで、イギリス文学の中心的伝統をなすものだと考える²¹。しかし夫人が好色作家であるなどとは、もちろん当時のピューリタニックなニューイングランドの読者には思いもつかなかった。彼らは小説の表面のメッセージである家庭主義・暖炉主義とキリスト教的な博愛の精神を真っ正面から受けとめ賛意を表するとと

もに、一方、アメリカの南部地方の暴力と汚辱と狼藉振りに義憤を掻き立てられた。しかし、好色性とサディズム・覗き趣味が十二分に満足させられたが故に、逃亡した黒人たちの運命の行方やいかにと、サスペンス・ストーリーを読むような感覚で読み進んでいるのだという風には理解しなかった。だが、イギリス文学の主たる伝統を持ち出すまでもなく、まことに無意識の、また有意識の好色性こそが(様々なヴァリエントを以て)、人気を博する小説においてはその隠し味となっていることを、現代の作家や読者は既によく知っていると思われる。

結論として手短かに言うならば、アン・ダグラスのように当時の読者の知的な程度の低さを嘆いてみることも、あるいはまたジェイン・トムキンズのように、女性たちを巡る小説の家庭主義・聖書主義的な面を力説することから、一気に本小説をキャノンの高みに祭り上げることも、一面的である。本小説の持つ表のメッセージとともに、その裏に散見する好色性とサディズム的なエロティシズムの存在を見る必要がある。そしてその両面性が読者に訴えたのだというところを見る必要がある。本小説はそのような二重性を以て19世紀中葉のアメリカの読者の頭(Head)と心(Heart)の両方に強く訴えるものがあったのだ。

それでは、これがアメリカ文学のキャノンたりうるかどうかであるが、その問題はこれからも小説観の変遷とともに議論され続けるであろう。作品は最初、奴隷制度反対の論説を載せていた週刊誌(*The National Era*)に連載形式で書かれ、そのために筋の若干の混乱、重複、メッセージの反復などの無駄な部分も多く、従って中だるみしている部分もまた多い。キャノンの問題を論じる際にはそうしたことも考慮すべき問題として上がって来るであろう。

本書は19世紀中葉の、奴隷制度下の南部の、そのまた奥地のプランテーションの中での、奴隷たちの虐待のことを描いている。大きなプロットとしては、一方に、売られたアンクルトムが、良い奴隷主から悪徳の奴隷主への手中へ

と落ちていく運命の変転と、最後の虐殺死が描かれる。またもう一方では、自らの才覚と力とで、そのような悪魔の手から逃走し、そして最後、晴れて自由を獲得し、アフリカの新天地に黒人たちの新しい村を建設することに勤しむ黒人たちの解放の過程が描かれている。(独善的な解決法であることについては既に述べた。) その意味では、Theodore Dreiser の小説 *Sister Carrie* (1900) のように²²、キャリーの社会的上昇と Hurstwood の社会的下降といった小説全体を貫く骨太の構想力を以て描かれていて、その壮大なスケールでのサスペンス作りは比類ないものである。だが本小説のその迫力は、ストウが女性であったこと、牧師の家庭の出身者として、高いモラルティと人道主義を持っていたことによることが大きい。しかも小説の中心に黒人女性の虐待と性的搾取を取り上げたことにある。つまりは、19世紀半ばのアメリカ小説として、題材は優れてアメリカ的で、当時の社会問題の奴隷制であったにせよ、本小説は、高い道德性と複雑な猥褻性が微妙に寄り合わさった、イギリス小説からの大きな伝統の流れの中で把握さるべきものであるとして、小論を締めくくる。

註

- 1 本シンポジアムの企画兼講師は原口。他のパネリストは吉崎邦子福岡女子大学教授 (Whitman の詩とジャーナリズムに見られる黒人観)、池田志郎熊本大学助教授 (Melville の *Benito Cereno* に見られる黒人観)、それに山田久美九州大学大学院文学科院生 (Thoreau の John Brown 事件への態度) であった。
- 2 *Narrative of the Life of Frederick Douglass*. Edited by William L. Andrews and William S. McFeely. New York. Norton, 1996; Harriet Jacobs. Ed. Jean Fagan Yellin, *Incidents in the Life of a Slave Girl Written by Herself* Cambridge, MA. Harvard U. Press, 1987.
- 3 Norman Podhoretz. *Doings and Undoings: the Fifties and After in American Writing*. New York. Farrar, Straus & Giroux, 1964.
- 4 Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. Cambridge, MA. Harvard University Press, 1992.
- 5 William Faulkner, *The Sound and the Fury* (New York: Modern Library, 1957), p.105.

ちなみに「黒人」の英語は“colored people,”「クロンボ」は“niggers.”

- 6 難波雅紀「ハリエット・ビーチャー・ストウ」秋山健監修『アメリカの嘆き』松柏社 1999年
- 7 Andrew Delbanco, *Required Reading: Why Our American Classics Matter Now* (New York: Farrar, Straus & Giroux, 1997), p.54.
- 8 Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin* (New York: Modern Library, 1985) は、552頁の大作。
Uncle Tom's Cabin. Ed. Elizabeth Ammons (New York. Norton. 1997) は、細かい字がぎっしり詰まって388頁。なお拙論においては本書を使用し、引用頁あるいは引用章は本文中において括弧内に記す。邦訳では小林憲二訳『アンクルトムの小屋』明石書店 1995が本格的で優れているが、これも上下二段組で538頁の大作。本文中『アンクルトムの小屋』の訳は拙訳であるが、必要に応じて小林訳を参照させて頂いた。記して感謝の意を表する。
- 9 Ann Douglass, *The Feminization of American Culture*. New York. Knopf, 1977.
- 10 Jane Tompkins, *Sensational Design: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860*. New York. Oxford U. Press, 1985.
- 11 M. D. Reynolds, *Uncle Tom's Cabin and Mid-Nineteenth Century United States* (New York: McFarland, 1985), p. 8.
- 12 註の2を参照。
- 13 次に見るように、リグリーとキャシーの会話は奴隷主と従順な女奴隷のそれというより、主導権争いをする激しい夫婦同士のそれと言うべきであろう。
「何！このアマめ！戻って来たのか、ええ」
「そうだよ、戻って来たのさ」彼女は冷たく言った。「あたいの勝手にね！」
「嘘つけ、このあばずれめ！俺は一旦言い出したらそのとおりにするんだ。おとなしく俺の言いなりになれ。それとも奴隷小屋に行って、他の奴等と一緒に働きに出ろ。そのどっちかだ」
「あんたに踏みつけられて言いなりになるよりか、奴隷小屋の一番汚いところで暮らす方が万倍もましだよ！」
「それでも、お前は俺の足下で現に言いなりなのさ」そう言うと、彼は残忍な笑いを浮かべて向き直った。「それが俺の楽しみなのさ。さあ、俺の膝の上に乗きなよ、ええ、お前。そして言うことを聞くんだ。」彼は手首を掴みながらそう言った。
「あんた、いい気になるんじゃないよ！」眼を鋭く光らせながら女が言った。目つきにはぞっとするほどの荒々しさと狂気が宿っていた。(35章)
- 14 Joan Hedrick, *Harriet Beecher Stowe: A life*. New York. Oxford University Press, 1994.
- 15 Kate Chopin. *The Awakening*, 1899. Ed. Per Seyersted, *The Complete Works of Kate Chopin*. Baton Rouge and London. Louisiana State University Press, 1969.

- 16 Toni Morrison. *Beloved*. New York. Knopf, 1987.
- 17 「わたしはこれまで、『アメリカの奴隷制度』からこれというどんな不都合も受けずに、ずっと暮らしてまいりました。この目で見ることがありませんし、鞭の音をこの耳で聞いたこともありません。」ラルフ・エマスン 酒本雅之訳「逃亡奴隷法」『エマスン論文集』下 岩波文庫 1981 p.241.
- 18 Charles Edward Stowe, *Life of Harriet Beecher Stowe* (Boston: Houghton Mifflin, 1889), pp.148-49.
- 19 「あのいまいましい物書きの女たち」(“that d....d mob of scribbling women”) ホーソンのベストセラー小説を書く女性作家たちへの呪詛の言葉。出典は編集者 Ticknor への手紙の一節。Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of Nathaniel Hawthorne*, Vol.17 (U. of Ohio Press), p.304.
- 20 Harriet Beecher Stowe. *Lady Byron Vindicated: A History of the Byron Controversy, from its Beginning in 1816 to the Present Time*. New York. Haskell House, 1970. Originally published in 1870.
- 21 イギリス小説には〈姦淫〉観（つまりはセックスへの見方と態度）の時代的変遷にも係わらず、中核に確たるキリスト教的道徳観が存在することを指摘するレポートがある。大野龍浩「〈姦淫〉に見る英国小説の伝統」『伝統・逸脱・創造——人文科学への招待』清文堂 大阪 1999。特に第2章「英国小説とキリスト教」参照。私は、Sexuality についての過度な意識の仕方の源にキリスト教的なタブー意識（汝～するなかれ）があると見ている。
- 22 Theodore Dreiser. *Sister Carrie*. New York. Modern Library, 1997. Originally published in 1900.